國學院大學学術情報リポジトリ「K-RAIN」

中国語を母語とする日本語学習者の日中同形異義語における誤用を減らすための学習法
：
日中同形語の対照情報を学習者に提示する方法を用いて

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2025-07-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 顧, 偉長 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001765

博士学位申請論文要旨

中国語を母語とする日本語学習者の日中同形異義語における誤用を減らすための学習法
― 日中同形語の対照情報を学習者に提示する方法を用いて ―

文学研究科高度日本語教育コース　顧偉長

本研究は、日本語と中国語の間で意味のズレが存在する日中同形異義語を研究対象とする。1970 年代から、日中同形語についての研究が盛んに行われ、同形語の日中両言語の意味の相違の原因を考察する研究、または一つの同形語に関する日中対照研究が多くなされている。一方、中国語を母語とする日本語学習者（以下「学習者」と略す）を対象に、学習者の同形語における誤用実態を明らかにし、また、同形語における誤用問題を減らすための学習法に関する研究はまだ少ない。

そこで、本研究は、学習者に目を向け、同形異義語補助教材と学習法開発の二つの視点から、現代日本語における使用頻度の高い同形異義語を抽出、語の意味構成により 4 タイプ（D 型（日本語独自義＋中国語独自義）、0(1)型（日中共有義＋日本語独自義）、0(2)型（日中共有義＋中国語独自義）、0(3)型（日中共有義＋日本語独自義＋中国語独自義）[1]に分類し、「同形異義語リスト」を作成した。さらに、学習者の各タイプの同形異義語における誤用問題を明らかにし、先行研究で示されている同形語の対照情報を学習者に提示する方法の効果を検証した。

同形異義語の現代日本語書き言葉における割合、及び同形語の対照情報を学習者に提示する効果を明らかにすることで、学習者向けの日本語教育の現場に、また日中の民間交流のより円滑な発展に大きな役割を果たすことが期待できる。

先行研究について

学習者の同形異義語における認知処理に関する先行研究（加藤 2005[2]、陳 2009[3]、小森ほか 2008[4]、小森ほか 2014[5]、費 2015[6]）から、主に以下の二つの問題点が指摘できる。

1. 日本語習熟度に関係なく、同形語を中国語義で理解する傾向（言語転移）がある（小森ほか 2008、小森ほか 2014、費 2015）。（中国語義による言語転移）
2. 同形語の中の日本語独自義は、中国語義から判断する手がかりがないため、日本語習熟度が上級でも、正しく認知処理することは難しい（加藤 2005、陳 2009、小森ほか 2014）。（日本語独自義の習得）

学習者の同形異義語における誤用を検討している研究は少なくないが、しかし、管見の限りでは、学習者の同形語における誤用問題の解決策に関する研究はまだ少ない。

そこで、本論文は主に以下の二つの部分に分け、研究する。

(1) 第一部（第 1 章から第 4 章）

各タイプ（D 型、0(1)型、0(2)型、0(3)型）[1]の同形異義語が現代日本語書き言葉に占める割合や、学習者が日本語を学習する際に接触する可能性が高い日本の教科書における割合を明らかにし、また、学習者の各タイプの同形語における誤用問題、及び日本語習熟度との関連度を究明することを目的としている。

(2) 第二部（第 5 章から第 9 章）

第一部の研究成果に基づき、学習者の各タイプの同形語における誤用問題の特徴と合わせて、日本語習熟度の異なる学習者を対象に、同形語の対照情報を学習者に提示する方法を用いて、学習者向けの同形異義語学習法を開発する。

本研究は以上の点を明らかにし、学習者向けの同形異義語学習法を開発することを目的に、調査、考察を行う。

第一部における各章の構成

本研究は二部に分け、第一部（第 1 章から第 4 章まで）では国立国語研究所 （2015）『現代日本語書き言葉均衡コーパス BCCWJ』[7] をベースに、二文字同形異義語を全て抽出、分類した。次に、学習者の同形語を認知処理する際に生じる可能性が高い問題点に目を向け、日本語習熟度の違いが同形語意味処理に与える影響（「中国語義による言語転移」と「日本語独自義の習得」）について調査を行っている。

本文の第一部の前に序章を置き、序章では、(1) 本研究の目的、(2) 日中同形語が日中両言語において意味のズレが生じる原因について、(3) 日本語漢字単語の意味分類に関する先行研究の概観、(4) 日本語二文字漢字単語における日中同形異義語の割合に関する先行研究、(5) 学習者の日中同形異義語における誤用に関する先行研究、(6) 日中同形異義語における誤用を減らすための提案、(7) 本論文の構成、という 7 節に分け、本論文の趣旨を述べている。

第 1 章：現代日本語書き言葉における日中同形異義語についての量的調査

第 1 章では、国立国語研究所（2015）『現代日本語書き言葉均衡コーパス BCCWJ』をデータベースに、現代日本語書き言葉における同形異義語の割合や語彙を明らかにし、同形異義語を語の意味構成により 4 タイプ（0（1）型、0（2）型、0（3）型、D 型）に分類した。調査の結果から、日本語と中国語の間で共有義を持つ 0 型が最も多く（内訳：0（1）型は同形異義語全体の 24.8%、0（2）型は同形異義語全体の 26.7%、0（3）型は同形異義語全体の 22.3%）、全体の 7 割から 8 割を占めることがわかる。日本語と中国語の間で共有義がない D 型は同形異義語全体の 26.2%を占めることを明らかにした。また、国立国語研究所（2015）『現代日本語書き言葉均衡コーパス BCCWJ』での出現頻度の順位が 1000 に近い、頻用される同形異義語には、0（1）型の語数が 33 語で最も多く、0（2）型と 0（3）型が各 28 語で二番目に多く、D 型の語数は 16 語で最も少ないことがわかる。

第 1 章の研究成果を踏まえて、学習者の同形語における誤用問題を減らすため、「頻用される同形異義語リスト」の作成が学習者向けの同形語教育に大きな役割を果たすことが期待される。

第 2 章：日本の教科書における日中同形異義語についての量的調査

第 2 章では、学習者にとって、日本語を学習する際に接触頻度が高い日本の教科書における同形異義語の割合や語彙を明らかにするため、国立国語研究所（2015）『現代日本語書き言葉均衡コーパス BCCWJ』の教科書ジャンルのデータベースから同形異義語を全て抽出した。さらに、抽出された同形異義語の意味構成により 4 タイプ（0（1）型、0（2）型、0（3）型、D 型）に分類し、学習者の各タイプにおける誤用問題と合わせて考察した。調査の結果から、以下の点が明らかになった。

日本の教科書における同形異義語には、

1. 0（1）型は抽出された同形異義語全体の 25.9%を占める。

2.　O（2）型は抽出された同形異義語全体の 29%を占める。
3.　O（3）型は抽出された同形異義語全体の 21.8%を占める。
4.　D 型は抽出された同形異義語全体の 23.2%を占める。

第 2 章の研究成果を踏まえ、学習者の同形異義語における誤用を減らすため、教科書における「頻用される同形異義語リスト」の作成が学習者向けの同形語教育に効果を発揮することが期待される。

第 3 章：日本語習熟度の違いが同形語意味処理に与える影響（中国語義による言語転移）

第 3 章では、学習者の日本語習熟度の向上により、中国語義が同形異義語の意味処理に与える言語転移が有意に減少するかどうかを調査した。また、共有義のない D 型における「負の言語転移」は日本語習熟度順に有意に減少するかどうかを考察した。

調査の結果から、学習者の日本語習熟度初級から上級に至る過程で、母語中国語義から日本語の意味処理への言語転移は次第に抑制され、4 タイプ（D 型、O（1）型、O（2）型、O（3）型）の同形異義語における誤用率の減少には、初級と上級の間で有意な差が確認される。さらに、D 型同形語における初・中・上級学習者の平均得点を比較した結果、日本語習熟度が初級と中級、中級と上級との間に、それぞれ有意差が見られることが分かる。

D 型同形語における意味処理の過程で、未習語から既習語に転換し、また、必ずしも中国語義は日本語として成立しないことを習得するため、日本語習熟度順に、中国語義から日本語への負の転移が次第に抑制され、D 型同形語における誤用は有意に減少する傾向があることが分かる。

第 3 章の研究成果から、学習者の日本語習熟度の向上に伴い、中国語義から日本語への「負の言語転移」が次第に減少する傾向を確認できる。さらに、初・中級学習者の O（2）型同形語における中国語義から日本語への「過剰な言語転移の問題」が多く見られ、学習者向けの漢語の授業で注意すべき点として示した。

第 4 章：日本語習熟度の違いが同形語意味処理に与える影響（日本語独自義の習得）

第 4 章では、学習者の各タイプの同形異義語の日本語独自義における習得実態を明らかにすることを目的に、日本語習熟度初・中・上級の比較から、学習者にとっては難しい「日本語独自義」における誤用を調査した。

調査の結果から、総合的に見た場合、学習者の同形語の日本語独自義における認知処理について、共有義のない D 型と共有義のある O 型の誤用には有意差がないことが確認できる。一方、学習者の日本語習熟度が初級の場合、中国語義から日本語認知処理への負の転移を抑制することは難しく、正しく認知処理することはできない。一方、日本語習熟度の向上により、D 型における誤用率は有意に減り、習得が進む傾向がある。

第 4 章の研究成果を踏まえ、学習者の O（1）型、O（3）型、D 型同形語における誤用問題に合わせて、各タイプの同形語における日本語独自義の学習法を提案し、初級から上級まで、各タイプの同形語における日本語独自義の習得をより効率よく進めることが期待される。

第二部における各章の構成

第二部(第5章から第9章まで)では第一部の研究成果を踏まえ、先行研究(河住2005[8]、2010[9]、李 2006[10]）で指摘されている同形異義語の対照に関する情報を提示する方法を用いて、学習者の4タイプ（0（1）型、0（2）型、0（3）型、D型）同形異義語における誤用問題を減らすための学習法を開発する目的で、各日本語習熟度（初級・中級・上級）の学習者を対象に調査を行なっている。

第5章：同形語の対照情報の提示が同形語における認知処理に与える影響

第5章では、学習者が多く誤用している同形異義語に目を向け、同形異義語誤用に関する先行研究で明らかにされていない 0（3）型同形語における共有義と中国語独自義が学習者に与える影響、また同形語の意味についての両言語の対照に関する情報を学習者に提示することで各タイプの同形異義語における誤用に減少傾向が見られるかどうかを検討した。

調査は0（1）型、0（2）型、0（3）型、D型の4タイプの同形異義語を用いて、それぞれ同形語の対照に関する情報を提示しない段階と提示した後との二段階に分けて行った。

共有義のある 0（3）型における誤用率は共有義のないD型より中級・上級ともに低いこと、また、同形語の対照に関する情報を学習者に提示することで、4タイプの同形語における誤用率はいずれも減少し、特に 0（1）型における誤用は有意な減少傾向が見られることが分かった。

第5章の研究結果を踏まえ、同形異義語における誤用をより効率よく減らすため、対照情報を提示するほか、学習者の同形語に対する認識の是正や教授者の授業準備、同形語の対照情報を含めた補充教材の開発なども不可欠であることをふまえ、学習者向けの同形語学習法を提案した。

第6章：同形語の対照情報の提示が日本語習熟度の異なる学習者のD型同形語における認知処理に与える影響（上・中・初級の比較）

第 6 章では、学習者の D 型同形異義語における誤用を減らすための学習法を提案するため、日本語習熟度初・中・上級の学習者を対象に、二段階に分けた日本語自然さ判断調査を用いて、第5章で示されている提案（学習者に同形異義語の対照情報を提示する）の効果を検証した。

調査の結果から、初・中級学習者はD型同形語に接触する際、既習語である可能性が上級より低いため、初・中級学習者に同形語の対照情報などを提示することで、学習者の中国語義の活性化が抑制され、誤用率が有意に減少する傾向が確認された。一方、上級学習者はD型同形語を処理する経験が初・中級より多く、既習語を処理する経験から、このタイプの同形語を正しく認知処理できるが、「問題文を認知処理する際に、母語中国語義を用いて自然と判断した場合、日本語として不正解の可能性が高い。」のような情報提示は、逆に上級学習者の中国語義の活性化を喚起してしまい、誤用を減少されるのに有意な効果がない。

第6章の研究成果を踏まえ、初・中級を始め、D型同形語の日中両言語におけるそれぞれの意味、用法、また例文、つまり対照情報を学習者に提示することを、このタイプの同形語における誤用を減らすための学習法として提案した。

第 7 章：同形語の対照情報の提示が日本語習熟度の異なる学習者の 0（1）型同形語における認知処理に与える影響（上・中・初級の比較）

第 7 章では、学習者にとって誤用しやすい 0（1）型同形語を取り上げ、第 5 章で示している同形語対照情報を提示する方法を用いて、日本語習熟度初・中・上級学習者を対象に調査を行った。同形語の対照に関する情報を提示した第二段階と第一段階の平均点について、対応のある t 検定を行った結果から、初・中級学習者に 0（1）型同形語の対照に関する情報を提示することで、母語中国語義から日本語への負の転移が抑制され、このタイプの誤用を減らすには有意な効果があることがわかる。

一方、上級学習者は同形語を既習語として処理した可能性が初・中級学習者より高いため、第一段階での平均点が初・中級より高いが、第二段階と第一段階の間の平均点について、対応のある t 検定を行った結果から、0（1）型同形語の対照に関する情報を提示することで、このタイプの同形語における誤用を減らすには有意な効果がないことが確認できる。

第 7 章の調査結果を踏まえて、同形語の日中両言語におけるそれぞれの意味、用法、また例文を提示することは初・中級学習者の 0（1）型同形語における誤用を減らすのに有意な効果があることが明らかになり、学習者向けの 0（1）型における誤用を減らす学習法として提案を試みた。

第 8 章：同形語の対照情報の提示が日本語習熟度の異なる学習者の 0（2）型同形語における認知処理に与える影響（上・中・初級の比較）

第 8 章では、日本語習熟度初・中・上級の学習者を対象に、前後二段階に分けた日本語自然さ判断調査を用いて、0（2）型同形語の対照情報を提示することがこのタイプの同形語の誤用減少に与える効果を検証した。調査の結果から、0（2）型同形語の対照情報及び解答例を提示する第二段階の調査では、初級から上級の学習者がこのタイプの同形語における「中国語独自義は日本語として成立しない」という認識を深めるようになるため、中国語独自義から日本語への「過剰な言語転移」が有意に抑制されることがわかる。

第 8 章の研究結果を踏まえ、同形語の日中両言語におけるそれぞれの意味、用法、また解答例を提示することを、学習者の 0（2）型同形語における誤用を減らすための学習法として提案した。

第 9 章：同形語の対照情報の提示が日本語習熟度の異なる学習者の 0（3）型同形語における認知処理に与える影響（上・中・初級の比較）

第 9 章では、学習者の 0（3）型を認知処理する際に、誤用が発生する恐れのある二つの問題点（中国語独自義から日本語への「過剰な言語転移」、中国語義から日本語への「負の言語転移」）に目を向け、学習者向けの 0（3）型同形語における誤用を減らすための学習法を開発することを目的に、日本語習熟度初・中・上級の学習者を対象に、調査、考察を行った。

調査の結果から明らかになった点は以下の通りである。

1. 中国語独自義による問題文について、同形語の対照情報及び解答例を提示することで、上級（$t=-2.837, df=14, p<.05$）と初級（$t=-5.29, df=14, p<.001$）学習者のこのタイプの同形語における「過剰な言語転移」は有意に減少する傾向が確認される。一方、中級学習者（$t=-2.091, df=14, n.s.$）のこのタイプの同形語を認知処理する際に、「過剰な言語転移」による誤用は有意に減少する傾向がないことがわかる。
2. 日本語独自義による問題文について、同形語の対照情報及び解答例を提示すること

で、上級（t=-2.386, df=14, p<.05）、中級（t=-2.613, df=14, p<.05）、初級（t=-5.278, df=14, p<.001）学習者のこのタイプの同形語における「負の言語転移」は有意に減少する傾向が確認される。

第9章の研究成果を踏まえて、0（3）型同形語の日中両言語におけるそれぞれの意味、用法、対照に関する情報、また解答例を提示することを、学習者のこのタイプの同形語における誤用を減らすための学習法として提案した。

最後に、第10章では、第一部と第二部の研究成果を踏まえて、(1) 本研究の総括、(2) 研究の意義、(3) 今後の課題、という3節に分け、本研究各章の研究成果をまとめ、学習者向けの日本語教育現場に期待できる効果や、これから、明らかにしたい日中同形異義語に関する課題について述べている。

---

1. 王燦娟（2015）「日中同形語辞典の問題点及びその改善策をめぐって」『芸術工学研究』22, pp.59-65, 九州大学大学院芸術工学研究院紀要『芸術工学研究』編集委員会
2. 加藤稔人（2005）「中国語母語話者による日本語の漢語習得－他言語話者との習得過程の違い－」『日本語教育』125, pp.96-105, 日本語教育学会
3. 陳毓敏（2009）「中国語母語学習者の日本語の漢字語習得研究のための新たな枠組みの提案: 意味使用の一般性と意味推測可能性を考慮して」『日本語科学』25, pp.105-117.
4. 小森和子・玉岡賀津雄・近藤安月子（2008）「中国語を第一言語とする日本語学習者の同形語の認知処理 : 同形類義語と同形異義語を対象に」『日本語科学』23, pp.81-94.
5. 小森和子・玉岡賀津雄・斎藤信浩・宮岡弥生（2014）「第二言語として日本語を学ぶ中国語話者の日本語の漢字語の習得に関する考察」『中国語話者のための日本語教育研究』5, pp.81-94.
6. 費暁東（2015）「中国語を母語とする日本語学習者における日本語漢字単語の学習過程-中日2言語間の形態・音韻類似性による影響-」『学習システム研究』1, pp.48-58, 広島大学学習システム促進研究センター
7. 国立国語研究所 （2015）『現代日本語書き言葉均衡コーパス BCCWJ』短単位語彙表（Version1.1） 国立国語研究所コーパス開発センター
8. 河住有希子（2005）「中国語を母語とする日本語学習者の漢字語彙使用に見られる問題点」『早稲田大学日本語教育研究』7, pp.53-65.
9. 河住有希子（2010）「中国語母語話者による日中同形語の学習方法について」『JSL 漢字学習研究会誌』（第2号）, pp.35-37.
10. 李愛華（2006）「中国人日本語学習による漢語の意味習得-日中同形語を対象に-」『筑波大学地域研究』26, pp.185-203.